

○南方各地に於けるキンマの土名に就て (藤田安二) Yasuji FUJITA: On the local names of Betel pepper in Sourthern Asia.

前報¹⁾に続いて更に廣く南方各地に於けるキンマ (*Piper Belle* Linn.) の土名を集めて、その民族学的意義を求めんとする。

1924 年 Przyluski は「インドアフリカ語に於ける非アフリカ語借用」なる論文に於て Sanskrit に於けるキンマの呼称 *tambula* はオーストロアジア語源であつて、アフリカ民族が北方寒冷の地方から印度の熱帯に來り、そこに栄えていたオーストロアジア語族から語彙を借用したものであると主張する²⁾。即ちオーストロアジア語族に於けるキンマの呼称は Khmer にては *mluv*, Siam にては *phlu*, Old Annamese にては *blau*, Mon にては *jablu* であつて、これ等のものより Sanskrit の *tambulam*, Pali の *tambuli*, *tambulam*, Prakrit の *tambolam*, *tamboli* 等が出來たものであつて³⁾、ベルシャ語の *tambul* も亦明かにこの系統に屬する。

さて Khmer の *m-luv*, *m-luw* の原型は Przyluski によれば *malu* であるが、この型のものは現在そのまま小スンダ諸島に残存し⁴⁾、Solor 島にては *malu*, Alor 島にては *maluh*, Timor 島にては *moloh*, Kisar 島にては *malhu*, *maluhe* となる。

又 Mon の *jablu* 型としては Malay の *jambai*, *jambi*⁵⁾, Sumatra 中部西側の Minangkabau の *tjambai*, Sumatra 最南部の Lampong の *tjambai*, Celebes 北部の Golontalo の *tembe* 等がある⁴⁾。

Old Annamese の *blau* 型としては Sumatra 北部の Gajo の *blo*, Alas の *blo*, Batak の *beio*, Sumbawa 島東部 Bima の *bulu* (Kolo-dial), Celebes 北部の Parigi の *bolu*, Barée の *baulu*, Celebes 西南部の Mandar の *baulu* 等がある⁴⁾。

前報¹⁾に於て述べた様に台灣に於ける Bunun の *bira*, Panapanayan の *bira*, Amis の *bira*, 花蓮港熟蕃 Kabaran の *vera* も亦この系統に屬するが、Sumatra 西部の Engano 島ではキンマを *furu-kuwe* 又は *puro-kuwo* と言う。これは明かに Annam の *blau*, Siam の *phlu* の流れを引くもので、このものが更に Timor 島で *furuk* となり、又西部 New Guinea に *fur*, *furdor*, *furikaw* として残つているのは⁴⁾誠に注目すべき周辺現象で、特に Engano 島と西部 New Guinea との *furu-kuwe*, *furikaw* の合致はこのものの古代性を示すものである。

支那に於ける扶留 (*fuliu*, *furu*) は吳錄地理志、蜀記に出で、5 世紀の齊民要術に引用されて残つているが、これもまた明かにこの系統に屬し、印度支那から南支への古い傳播を示すものである。

又 Hindu にてもキンマを *bira*, *biri* と称するが、これは台灣蕃族のキンマの呼称 *bira*, *vera* と完全に一致する。これは前報¹⁾に於ても述べた如く上記台灣蕃族が Hindu 文化の影響を受けている事を示す。Tamil 語, Malayalam 語等に於ける *vettilei*, *vettilla* は *veru-ila* より出て *simple leaf* を示すが⁵⁾、台灣の蕃族の *bira*, *viri* が又

葉を示す事はこの兩者の關係を一層明かにするものと思える。この *vettila* から西歐の *betel* が出た事は人のよく知る處である。

更にこの *blau* 系の流れを引いて別に分化したものが Borneo の Dajak の *buju*, Celebes Golontalo の *biu*, Buolsch の *buju*, Tolitoli の *biu*, 北部 Halmahera Galelo の *bido*, Ternate の *bido*, Tidore の *bido* 等⁴⁾であつて, Philippine に入つては Sulu の *buyu*, Bisaya の *buyok*, Mindanao 島東北部の Manobo の *buyog*, Tagalog の *buyo-anis*, Luzon 島東南部の Bicol の *buyo*, *buyo-buyo* となる⁶⁾。同系異層と考えられる。

次に興味があるのは *gaud* 系であつて Philippine に於ては Luzon 島の Pangasinan にて *gaëd*, Ilokano にて *gaüed*, Itaneg にては *gauod* と称し⁷⁾, 又 Bataan にても *gawed* と称する⁸⁾。然るに台湾の Yami も同系の *gaud* である^{8), 9)}。台湾本島に於ける Rukai の *ragao*, Paiwan の *zagao* もこの系統で, *gaod*→*gao*→*zagao*→*ragao* の如き關係にある。Borneo の Dajak の一部でキンマを *laoed*⁴⁾ と言うのも同系である。

又別に *luet* 系があるが, Borneo の Dajak の一部でキンマを *luet*, *luat*, *rawut* と言ひ, これは Halmahera 南部では *lèlè*, Ternate でも *lèlè* となる⁴⁾。然るに Philippine の Bataan, Bulacan, Rizal, Cavite, Tayabas 等にては *letlèt*, *litlit* となる¹⁰⁾。恐らく Dajak の *luet* から一方 Philippine の *lètlet* が出で, 他方 Halmahera の *lèlèt* が出たものであろう。

この外 Mollucas には *amu* 系があり, 西部 Ceram にては *kamu*, *amu*, 南 Ceram にても *kam*, *amu*; Amboina にては *amu*, Ulias 島にては *amu*, *amul*, *amulo* となり, Buru 島にては *gamo*; Sula 島にては *gam* となる。

又小スンダ諸島中の Tanimbar 島には *inaan*, *owaan*, *naan* 等があり, Kai 島には *naan*, 西 New Guinea にては *kenaan*, *kènan*, 北 New Guinea にては *keman* となる。更に Ceram 島東部にては *ain*, *nein* があり, 西 New Guinea にては *nain*, *nandain* となり, 西南 New Guinea にては *ain* である。

なお Sumatra 西部海上の Nias 島でキンマを *afo* と言うが, 遠く離れた New Guinea の西部にても *afe* と言う處があるのはこれ又甚だ注目すべき残存現象である⁴⁾。

又台湾の Yami はキンマを *rankap*^{8), 9), 11)} と呼び, Sumatra の Atjeh にては *ranub*, Celebes 北部にては *rambik*⁴⁾ とも呼ぶが, 或は一系統に属するものかも知れない。

これ等の外最もよく知られ又最も新しいものが Malay の *sireh* であつて, Sumatra にても Malaid は *sèwèh*, *sihè*, *sirèh*, *siriah*, *sirih*, *suruh* 等と呼び, Minangkabau にては *sirieh*, Gajo にては *séreh*, Borneo の Dajak も *sirih*; Sunda にては *seureuh*, Java にては *sedah*, *suruh*, Bali にても *sedah*, *madura* にては *sèrè* となる^{4), 12)}。

以上の如くキンマの方言は最古代に於けるオーストロアジア語を基盤として大きな層をなして拡がる。これを *blu* 層と名付ける。この基底の上に最上層として Malay 系の *sireh* 層があり, その中間に色々の雜層が存在する。遠く離れた散在層は明かに古いも

のの残存であり、近接した小地域のものは比較的新しいものである。かくしてこれ等の関係はそのまま民族と文化との移動とその方向を示す。

(通産省大阪工業技術試験所精油研究室)

文 献

- 1) 藤田：台湾博物学会會報，26, 190 (1936). 2) 松本：古代文化論，47 (1932) (現代史学大系 10). 3) Laufer: Sino-Iranica, 268 (1919); 松本：南亞細亞学報，1, 20 (1942). 4) Heyne: Nutt. pl. Nederland. Ind., 1, 517 (1927). 5) Yule, Burnell: Hobson, Jobson, 89 (1903). 6) Merrill: Enum. Phil. Flow. Pl., 2, 4 (1923); Brown: Min. Prod. Phil. Forest, 3, 66 (1921). 7) Merrill: Enum. Phil. Flow. Pl., 2, 4 (1923). 8) 鹿野：東南亞細亞民族学，先史学研究，120 (1946). 9) 奥田，岡田，野村：大南洋 (太平洋協会編)，352 (1942). 10) Brown: Min. Prod. Phil. Forest, 3, 66 (1921). 11) 佐々木：台湾博物学会會報，10, 152 (1920). 12) Burkill: Dic. Econ. Prod. Malay Pennis., 1738 (1935).

〇ヤグラタマネギ (新稱) に就て (青葉 高) Takashi Aoba: Top Onion cultivated in Japan.

昭和 25 年山形県東田川郡押功村佐藤氏培養中の櫛葱と称するものを調査の結果，これが所謂 Top Onion であることを認めたが，最近農林省九州支場園芸部長熊沢三郎氏よりも同様に認定され，且本種が青森，岩手県下で栽培されて居る事を報らされた。

従来此の Top Onion は我国の園芸書にも玉葱の変種 *Allium cepa* L. var. *viviparum* Metz. として記載されては居るが，本邦内の栽培例は見当らず，従つて和名もなく，熊沢氏も“*A. cepa* 系の櫛葱”と称して居る。併し *A. fistulosum* L. var. *viviparum* Makino がヤグラネギの和名で呼ばれているのであるし，同名で本種を呼ぶ事は適当でなく，しかも本種が現に我国で培養を見て居るのではあり，此の意味から Top Onion はヤグラタマネギと呼ぶのが適当であらう。

但し本種が眞の Top Onion である事に就ては猶若干の疑点もあり (本系統の染色体はネギ及びタマネギのそれと全然異り，むしろワケギの染色体と極めて類似して居る。栗田氏未発表) 是非とも眞の Top Onion と比較する要がある。

尙本種の特性は下記の通りであるが，更に本種は雌性不稔系と認められ，此の点からも興味あるものである。

特性 草丈，60 (以下単位 cm)。葉鞘部の長さ 14，地下球の横径，2.6，縦径 3.9，花莖の長さ 1 段 63，2 段 31，3 段 5，最も太い部の径 2，胎芽の横径 1.7，縦径 1.9，胎芽数は 1 段目 4.7，2 段目 2.8，3 段目 2.0，花数 17~180。花穂分化期は 2 月，抽苔 5 月中下旬，開花 6 月下旬，夏期には葉が枯れる。花はタマネギの類に似る。但し葯の退化のため結実せず，胎芽に依り繁殖する。春日生長した葉身を球と共に食用とする。

(山形大学農学部園芸学教室)